

---

# かぐや

橙

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

かぐや

### 【Nコード】

N3874S

### 【作者名】

橙

### 【あらすじ】

文緒の仕える屋敷には、一人の姫君がいる。

「雲居の方」と呼ばれる、天女のように美しい姫が。

「竹取物語」からの創作。

## 一（前書き）

「竹取物語」からの創作小説です。

原典がお好きで、そうした創作に抵抗を覚える方は、ご注意ください。  
い。

阿部の大臣がお帰りになる。

ちょうど東門近くを警備していた文緒には、何人かが簀子を渡っていく密やかだが慌ただしい足音が聞こえた。

直垂に丈夫な手甲と脛巾はだしきをつけ、腰には借り受けた刀を差し、格好は武者然として屋敷を背に立っていたが、つい気をひかれて文緒は耳をそばだてた。

大臣の一行はいつも東の棟で用を済ませたら、ぐるりと母屋を回って庭などを愛で、ゆうゆうと西の正門から帰っていく。来る時は驚くほど素早いのに、帰りは未練たらしく亀のようにのろのろとして、なかなか帰ろうとしないのだと評判だった。西門の車宿には既に、豪華に飾り立てた車がとめてあるだろう。文緒は見たことがなかったが、屋敷を車にしたかのような大きさと、簾に金糸を施したというそのきらびやかさについて話は聞いていた。

篝火の薪木がはぜて、足元を照らす火影が揺れた。文緒は何気なく空を見上げた。今夜は雲もなく、星が明るく美しい。阿部の大臣が来た時と、瞬く星の位置はさほど変わっていないかった。

文緒のすぐ隣にいた侍が、「なあ」と小さく声をかけてきた。

「今日は特に短いな。一刻ももたなかったんじゃないか」

まさに今同じことを考えていた文緒は、ちらりと隣に目を向けた。顎髭をはやした侍が、にやにやと愉快そうに笑っている。

確か、男鹿という侍だ。文緒は少しの間考え、そう思い出した。雑舎で共に寝起きする仲間である。かといって、別段親しくもない話をしたことがないので、どうという人物なのかも知らなかった。だ

が男鹿は、妙に馴れ馴れしい調子で言葉を続けた。

「阿部殿もおかしいそうに。きつとまた、体よくあしらわれたんだろつよ」

なあ、と同意を求められたが、文緒は頷かなかった。阿部の大臣を「かわいそうに」とは思わなかったからだ。だが男鹿は構わず、一人で喋り続けた。

「さすが『雲居の方』様だよ。本当に、誰が姫様の御名を得ることができるのやら」

「雲居の方」とは、この家のたった一人の姫君　竹姫のことだ。天女のように美しく、芳しい姫。主夫婦が掌中の珠のようにいくしみ、取るに足らぬ者では垣間見ることさえかなわない。その意から、いつしか「雲居の方」という二つ名がついた。

だがこの二つ名には、ひそかな揶揄も込められている。　それは、竹姫が数多寄せられる求婚を断り続けていることからきていた。

地上の男には興味のない、天のごとく気位の高い姫。「雲居の方」とは、そのような意味もあった。

一方では感嘆と称賛を、もう一方では嫉妬と怨嗟を込めて囁かれる名である。男鹿のにやにやと下卑た笑いからは、後者のあてこすりが透けて見えた。

「とんでもない姫君だよなあ、まったく」

男鹿は肩を組むような気安さで、文緒に顔を近づけた。

「馬鹿馬鹿しい条件をふっかけては、やんごとない方々からの求婚さえ断っているというじゃないか。お前も、聞いたことがあるだろう」

息のかかりそうなほど寄せられた髭面から、文緒は顔をそむけた。共感を求められても、頷く気など毛頭ない。話す気はないと態度で

示したつもりだったが、男鹿は気を悪くする様子もなく続けた。

「花の命が短いとも知らず、持て囃されて、図に乗っておるのだからうよ。さしたる血筋でもない、鄙の姫が」

「黙れ」

ついに堪えきれず、文緒は遮った。

「主家の姫様に向かつて、そのような口を聞くなど。無礼だぞ」

だが男鹿は唇を歪め、肩をすくめただけだった。文緒の言い分を、建前だけのものと取ったようだった。

「主家など」

男鹿は鼻で笑ってみせた。

「どうせ、我らは一時の雇われ者だろう。美しさを鼻にかけた女と、そのおかげで成り上がっただけの家を、どう敬えと？」

この家の警護をする侍たちは、つい先頃雇い入れられたばかりだった。まばゆいばかりという竹姫の美しさの噂が世に広まるにつれ、夜な夜な屋敷に忍び込もうとする輩が後を絶たなくなった。それを憂えた主人が、屋敷の警備にと侍を集めたのだ。

男鹿も、その時に集められた侍の一人なのだろう。まだこの家に対して忠義に篤いとは言えず、むしろ気に食わないとさえ思っているようだった。男鹿はふと眉をひそめた。

「そつえば、警護の全てが雇われ者ではないのだったか。なるほど、下人あがりの侍とは、お前のことか」

しげしげと見られ、文緒は黙ってついと目をそらした。だがそれが答えになったようで、男鹿は納得したとばかりにはあ、と声を上げた。

「名は確か、文鷹とか申したな。なるほどなるほど、確かに変わり者だ」

変わり者と言われて、文緒の眉間の皺がぐつと深くなった。

いい加減、この男の馴れ馴れしさに我慢がなくなってきた。

苛立ちをにじませて、文緒は聞いた。

「……何がだ」

男鹿は顎を撫で、にやりと口の端を釣り上げた。  
「だってお前、この家の主に疎まれているそうじゃないか」

「」

文緒は虚をつかれ、言葉につまった。男鹿は眉を上げ、値踏みするように文緒の全身をじろじろと眺め回した。

「下人あがりの賤しさを疎まれているのか？まあ確かに、貧しさのにじみ出ているような顔立ちだが……」

「貧しい顔立ちはお互い様だ」

文緒は冷たく言つて、無駄話を切り上げようと男鹿から数歩離れた。怪しげな者がいないかどうか、辺りを見回す。その背中に、男鹿の軽い声が投げられた。

「それだから変わり者だと言っただよ。たかが下人のくせに、主に嫌われている」。 お前一体、主殿に何をしたんだ？」

文緒は答えなかった。大仰な男鹿のため息が聞こえたが、それも無視した。そもそも警護中に無駄口など叩いていては、家人にどやされてしまう。阿部の大臣が帰つても、夜が明けるまでは、文緒たち侍の仕事は終わらない。

主に疎まれているそうじゃないか。

何気ない男鹿の言葉で、この屋敷に来てもう十年近くになるのだと、ふいに思い出した。

涼やかな風が、どこからか淡い萩の花の香りを運んできた。柄にもない、郷愁のような切なさがかみ上げそうになり、文緒は差し慣れぬ刀の柄を、ぐっと握り締めた。

## 二

夜半、警護を一時交代し、男鹿と文緒は雑舎に戻った。

侍らが入る雑舎は屋敷の北東にある、まだ真新しい小屋だ。ここに十人ほどの侍が詰め、寝起きしている。中に入ると、小さな燭台で灯りがとられ、すでに何人かの侍がくつろいでいた。

戸口のすぐ脇に棚が置かれ、その上の大きな土器かわらけには、厨から運ばれた強飯の握り飯がいくつか用意されている。同じく短い休憩に入った侍らが、板張りの間に座り、黙々とそれを食べていた。

握り飯を手にとって、文緒は座る場所を探してぐりと周りを見回した。そして、僅かに目を瞠った。

土間を上がつてすぐのところに、珍しい人物がいたからだ。

「これは、佐貫殿」

文緒より先にその人物に気づいた男鹿は、さっと礼をして、不真面目な顔を器用に隠した。文緒も遅れて頭を下げる。

大層不機嫌な顔をした家人の佐貫が、苛立たしげに足を踏み変えながら立っていた。

誰の目にも、家人の虫の居所が悪いことは明らかだった。おかげで握り飯を頼張る侍たちは皆神妙な顔をしていて、明るく冗談を言う者などいなかった。

この侍たちは、一息入れる時には下世話な噂話などをして笑い合つのが常だ。文緒は別段それを聞きたいとは思わないが、この舎がしいんと重く静まり返っているのは、何か居心地悪く感じられた。

文緒はそつと背をかがめて移動し、目立たない土間に面した部屋の隅に座った。目をつけられ、難癖をつけられてはたまらない。下



人の頃からずっと、この家人が苦手だった。

だが男鹿はへらへらと笑い、あの独特の気安さで佐貫に声をかけた。

「佐貫殿、このようなむさ苦しい所まで足をお運び頂いて、かたじけのうございます」

ぺこりとこたわりなく頭を下げてから、男鹿は窺うように首を傾けた。

「ですが……何ぞ、ございましたか？」

なぜこの家人が、侍の雑舎にいるのか？この場の誰もが疑問に思っていて聞けなかったことを、男鹿はいとも容易く、さらりと尋ねた。なるほどあの馴れ馴れしさは、人の懷に飛び込む時には大した武器になるのだと、文緒は感心する思いだった。自分には逆立ちしても真似できないことだ。

「ふん、用などないわ。……手がすいたのでな、お前たちの監督もわしの仕事だ」

佐貫は憎々しげに吐き捨てた。男鹿が気の抜けたような声で返す。

「はあ、お手がすいて……」

男鹿はとぼけたが、「手がすいた」とはつまり、客人 阿部の大臣があまりに早く帰ったせいだろうと、文緒でさえも予想がついた。佐貫は親指の爪でも噛みそうな勢いで、苛々と言った。

「まったく、このごろの竹姫様のなさりようは、常軌を逸している。阿部様に向かってあのような態度をおとりになるとは、ひどいお叱りを受けてもおかしくないぞ」

誰かに向かって言ったのではない、独り言めいた愚痴だったので、侍たちは誰もそれに応えなかった。よほど腹にすえかね、不満だったのだろう、佐貫はぶつぶつと小言を続けた。

「今度は『火鼠の皮衣』だ。わしは見たことも聞いたこともないぞ、

そんなもの。どこにあるとも知れぬ『火鼠の皮衣』を持って来いは、縁談をお受けする気がないと言っているようなものだ……」

聞くともなく佐貫の独り言を聞いていた文緒は、思わず口元を緩ませた。

ひどく、懐かしいものを聞いたからだ。「火鼠の皮衣」とは、もう何年ぶりに聞いただろうか。思いがけず旧友に会った思いで、文緒の胸の奥がふと温かくなった。

「何を笑っている？」

陰呑な声が飛んできて、文緒ははっとして顔を上げた。離れた所からどう目ざとく見つけたのだろうか、佐貫が腕を組み、じろりと厳しい目つきで文緒を睨んでいた。

文緒はすぐに顔を伏せ、他意のないことを示した。だが、佐貫は床板を踏みならして文緒の目の前に来るや、もう一度問うた。

「何を笑っておるのかと、聞いたのだ。え？」

「……いえ、笑ったわけではありません」

平伏し、文緒は小さく答えた。それは本心からであった。

佐貫を笑ったわけではない。ただ懐かしく思ったただけだ。だが佐貫は唐突に、文緒の肩を蹴り上げた。

「賤しい下郎が、馬鹿にしおって！」

蹴り飛ばされた勢いで、文緒は背中から床にどうと転がった。叩きつけられるようにひどく背と肩を打ったが、とっさに手について、土間に転げ落ちるのを避ける。

だが手の中の握り飯は投げ出され、ごろりと土間を転がった。

文緒は思わずあ、と小さく声を上げて、土まみれになって転がる握り飯を目で追った。

「ここに『置いてもらっている』恩を忘れてはいやしないだろうな。お前など、いつ放り出してやつてもよいものを！」

佐貫はもう一度おまけとばかりに、文緒の肩を蹴飛ばした。痛みで少し息がつまったが、文緒はすぐに姿勢を立て直して、平伏した。目を閉じて、佐貫の怒りが解けるのを待つ。嵐をやり過ごすには、黙ってじっとしているのが一番良いのだと、文緒は知っていた。

佐貫は面白くなさそうに、ふんと鼻を鳴らした。

「姫様の話を笑った罪は重いぞ。覚えておれ」

唾を吐きかけるようにそう言い、佐貫は乱暴な足取りで舎を出て行った。

佐貫の足音が去り、文緒はゆっくりと顔を上げた。周りの侍が、はつとしたように素早く顔をそむける。家人の怒りにふれた文緒に声をかける者も、助け起こそうとする者もいなかった。

じんと痛む肩のあたりを押さえながら、文緒は土間に降りた。握り飯は土にまみれ、台無しになっていた。だが、大事な夜食である。今でさえ空腹なのに、これを失えば明日の朝には目を回すはめになってしまうだろう。文緒はそっと、崩れた強飯を拾い集め始めた。ふと顔を上げた時、にやにやと笑う男鹿と目が合った。

疎まれている。この家に。

ほつら見ろ、と言われたような気がして、文緒は目をそらした。

疎まれ、嫌われていると、誰より文緒自身がよく知っている。だがそれを、他人に面白がられたくはなかった。

土間に跪いたまま、文緒は飯の塊を大きく頬張った。じやりじやりと、砂を噛む感触を、無理やり飲み下す。食べなければならない。食べなければ、勤めを果たすことができない。勤めを果たさなければ、この家にいられない。

文緒は、放り出されるわけにはいかないのだ。

### 三（上）

文緒は十にも届かない幼い頃、山に捨てられた。

暮らしが立ち行かなくなつて、口減らしのためだった。前年からの日照りがたり、その年は田畑が何一つ実りをつけなかった。おまけに流行り病で文緒の父と兄弟がばたばたと死に、家には働き手がいなかった。

だから、仕方のないことだった。それに珍しいことではなかった。

文緒の父は国府に勤める小役人だったが、暮らしは他の百姓と同様、貧しかった。父は体が弱く度々臥せていたので、文緒には構ってもらつた思い出がない。

父が死んで、母は少しかけ暮らし向きが良い男のところへ、後妻として嫁ぐことになった。

けれどその家も子沢山で、もう子どもはいらなかった。母の嫁ぐための条件は、ただ一人残つた文緒を「始末」して、身一つで来ることだった。

周りは食うに困っている家ばかりで、養子に出す先もなかった。

文緒は父に似て体が弱く、よく熱を出しては寝込んでいたので、欲しいという者もいなかった。追い詰められた母親は、河原に暮らししていた男に一握りの米の入った袋を渡し、文緒を託した。

母の代わりに、文緒は見知らぬその男に手を引かれ、山に捨てられたのだ。

最後に見た母親の姿は、こちらに背を向け、項垂れているものだった。男が何を言つても、決して振り返ることはなかった。ほつれ髪のかかる痩せた首筋に、文緒は何か言うことも、手を伸ばすこともできなかつた。ただ黙つて、男に手を引かれるまま、家を出た。

荷物のようにどことも知らない山の中に運ばれ、ひとり残されて、文緒はしばらく動けなかった。

黄昏の山道は薄暗く、静かだった。鳥の声も、風が木々の葉を鳴らす音も、谷へと吸い込まれて文緒を置き去りにした。家に帰りたい、母の所へ戻りたいとは思ったが、自分が「捨てられた」ことは理解していたので、呆けたようにその場に座りこむことしかできなかった。

このまま飢えて、骨になってしまっただろうか。それとも熊や狼の餌になるのだろうか。じわじわ染みこむ恐怖にも、心が麻痺したようになっていた。文緒は煙のように頼りない自分の命の行方を、ただ呆然と見つめていた。

涙も出なかった。

しばらくそうしていた時、文緒は小さな声を聞いた。

「お父さん、お母さん」

かすれた細い泣き声だった。文緒ははっとして顔を上げた。

文緒が男に連れられて来た道を、同じくらいの子どもがおぼつかない足取りで歩いて来た。その子は泣きじゃくっていた。涙を拭く腕はやせ細っていて、足は黒く汚れていた。

自分と同じだと、文緒はすぐにわかった。この子も、捨てられたのだ。口減らして捨てられるのは、珍しいことではない。こんなにも、ありふれていることなのだ。

文緒は立ち上がって、その子に近寄った。顔を真っ赤にして泣いていた子は、ぽかんと顔を上げた。

近づいてみるとその子は文緒よりいくらか小さな子で、文緒は流

行り病で死んでしまったすぐ下の弟を思い出した。

弟も泣き虫だったので、文緒はよく頭を撫でてやっていたのだ。

一度面影を重ねてしまうと、もう放っておくことはできなかった。

「……おいで」

そうして文緒はその子の手を引いて、誰もいない山道を歩きだした。

月明かりだけを頼りに、二人は山道を歩いていった。

底の知らないほど深い山の暗闇は恐ろしかったが、文緒はそれに蓋をして見ぬふりをしていた。文緒が怯えれば、やっと泣きやんだその子もまた動けなくなってしまう。震える足を叱咤して動かし、恐ろしさから気をそらすために文緒は喋り続けた。

かたく繋いだ手だけが温かった。

「『火鼠の皮衣』は、遠い天竺の国にあつて、火にくべても燃えないんだ」

喋るのは、毎夜母から聞いていたお伽噺だった。

文緒は寢床で母のお伽噺を聞くのが好きだった。兄弟は皆、話の途中で寝てしまうことが多かったが、文緒だけは夢中になって聞き、いくつも母にせがんだものだった。

母は早く寝なさいと、困ったようにため息をついていたが、それでも文緒が満足するまで不思議な世界の話を続けてくれた。飽きもせず、何度も同じ話をせがんだこともあった。

だから文緒は、どのお伽噺もそらで話すことができた。

「ひねずみつて何？」

「炎をまといつて走る鼠のことだよ。真っ赤な体をした、野火をもたらず獣」

お伽噺を語ることは、母親の温もりを思い出すことだったけれど、

文緒はその悲しみを押し殺した。今はもういない兄弟と、競って母の腕にすがって話をせがんだ。夜は母のお伽噺を聞きながら、皆で体をぴたりと寄せ合って、隙間風をやり過すごして眠るのだ。

ついこの間までであった日常だというのに、その思い出はもはや、お伽噺の天竺の国よりも遠かった。

「…………どこに行くの？お家はこっちなのか？」

その子が不安げに周りを見回した。

その問いに、文緒は答えられなかった。

家には帰れない。自分たちは捨てられたのだから。迷いなく手を引いて導いているようでいて、文緒にはここがどこなのかもわからず、向かう先もなかった。今歩いている道がどこかの里へ続いているのか、それとも奥山へ迷い込んでしまう道なのかもわからない。

けれど歩くことをやめてしまつたら、もうそこで死んでしまう気がした。何かに追われているような気分で、文緒はあてもなくただ歩いていった。



### 三（下）

風が獣か、近くの茂みがかざりと音を立てて揺れた。二人はびくりと身を竦ませて、ついに足をとめた。

恐怖を抑え込んでいた脆い蓋が外れて、文緒の背中にどつと冷たい汗が流れた。

月の光は木々の梢に遮られて、すぎるにはあまりにか細い。眼前にばかりと口を開けて待ち構えている深い闇に、ここは人のいて良い場所ではないのだと、文緒はまざまざと悟った。

繋いだ手からかたかたと震えが伝わって、文緒ははっとして隣に立つ子どもを見た。

暗闇に魅入られたように目を見開いて、その子は歯の根も合わぬほど震えていた。これほど恐怖に追い詰められた人を、文緒は見たことがなかった。

「お母さん　！」

その子は小さく、悲鳴のように呟いた。

文緒は打たれたように、立ちすくんだ。それは、文緒自身の叫びでもあった。

お母さん　。

本当はそう言って、大声で泣きたかった。どうして捨てるんだと母をなじって、いい子でいるからと謝って、家に帰りたいかった。

捨てられたことを受け止められず、心が麻痺してぼんやりしてしまっていたけれど、そうすればよかったのだ。仕方がないなどと思わずに、泣きわめいて、母と一緒にいたいと言えばよかった。

この子のように。

けれど、もう遅い。ここで泣いても、怒っても、絶対に母には届かない。

文緒は震える子どもを抱き寄せた。

なぐさめも、安心させられる言葉も言えない文緒の、それが精一杯だった。

この子がかawaiiそうだ。そしてこの子どもは、自分自身だった。

文緒はかばうようにその子を抱きしめて、ゆっくりとその場に座り込んだ。

文緒とその子のどちらが震えているのか、もうわからなかった。心の臓が早鐘を打つ。文緒は固く目をつむった。目を閉じた暗さの方が、まだ恐ろしくない気がした。

怖い。怖い。

「……皮衣があつたら、あつたかいだろうなあ」

震えた声は、恐怖を誤魔化し切れてはいなかった。きつと鼓動の音も、その子に伝わってしまっているだろう。だが文緒は無理にでも明るい声を出そうとした。

「こんな山でも、きつと寒くない。それに珍しい宝物だから、皆が欲しがって……きつと、腹いっぱいになるくらいの食べ物と換えられる。そうしたら……」

そうしたら、家に帰れる。

そう続けることはできなかったが、文緒は腕の中で震えるこの子が、少しでも楽しいことを考えればいいと思った。闇にのまれる恐怖ではなく、楽しいお伽噺の中にいたかった。

文緒もこうして、温かい母の腕の中でお伽噺を聞いていた。母の

語るようにはいかなかったが、文緒はそれを思い出しながら、語り続けた。

「珍しい宝物は、他にもたくさんある。しろがねこがね、紅さんご。どんなものかよく知らないけど、すごくきれいなんだって。海の中の竜宮や、偉い仙人さまのお屋敷を飾っているんだ」

一度も見たことはないけれど、文緒はまぶたの裏に、きらきらした宝物を思い浮かべた。思い描くことは簡単だ。方法は、お伽噺の夜に、母から教わった。

「しろがねは晴れた朝の雪みたいで、こがねは輝く満月みたいなんだって」

暗い山の中に、母はいない。火鼠の皮衣も、珍しい宝物もない。ここにいるのは、自分と、小さなこの子だけだった。

月明かりさえ、頼りにならない。暗闇の恐怖を紛らわせてくれるものは、物語しかなかった。

「仙人さまのいる蓬菜には玉の枝があって、それは根がしろがね、茎はこがねでできてるんだ。白玉の実がなっていて、とてもきれいで……」

「……白玉って、食べられる？」

腕の中の子は、おずおずと文緒を見上げて、小さな声で聞いた。いつしか、震えはおさまっていた。二人ともまだ鼓動は早く、体は緊張で強張っていたが、文緒は少し笑った。上手くお伽噺に誘い込むことができたようだ。

「知らない。でも木の実なら、食べられるんじゃない？」

文緒が答えると、その子は少しだけ肩の力を緩めた。

暗いのでよくわからないが、どうやら笑ったようだった。

「……おいしいのかな。甘いといいな」

ぐつ、とどちらかの腹が鳴った。文緒はこっそりと唾を飲み込んだ。

食べ物をおぼせる話は、やめた方がいいかもしれない。ひもじさには慣れてはいたが、空腹を思い出すと、どうしても気が沈んでしまう。

他の話にしよう。不思議な物語は、たくさんあるのだ。

「あのね、昔、泉で水浴びをしていた天女さまがいてね……」  
月が傾き、その子が疲れて眠りに落ちるまで、文緒は語り続けた。身を寄せ合って、少しでも寒くないように、おそろしい夜を過ごした。

そして、この子と最期まで歩き続けようと決めた。

足が動くかぎり歩こう。いつか疲れ果てて倒れるまで、二人でいよう。

自分もこの子も、泣かないように。さみしくないように。恐怖と悲しみに押しつぶされないように。

### 三（下）（後書き）

白玉は真珠のことです。食べられないですね…

#### 四（上）

文緒は庭先に跪いていた。神妙に顔を伏せてはいたが、内心ではなぜ自分はここにいるのかと、大いに混乱していた。じつと地面の白砂を見つめながら、文緒は耳だけすまし、自分のおかれた状況を把握しようとした。

簀子の上には平伏する文緒を見下ろして、佐貫がにやにやと笑って座っているのだらう。高圧的に呼び掛ける声には、この状況を楽しむような喜色があった。顔は見えずとも、文緒の狼狽は伝わっているようだった。

「早く答えぬか。もったいなくも中納言様が直々に、お前に聞いているのだぞ」

文緒は一層頭を低くし、額を地面に擦りつけた。困惑して、唇をかむ。

答える、と命令されても、それは許されないことだとわかっている。身分が違うのだ。うっかり文緒が口を聞こうものなら、弁えよと打擲されてしまうだろう。

頭上、佐貫より遠くから、高くくぐもった声が聞こえた。

「構わぬから、申せ。『燕の子安貝』とは一体何なのだ？」

これが中納言の声なのだろうか、それともつき従っている随人のもののなのか、文緒にはわからなかった。ただ男にしては甲高く細い声だと思っただけだ。

まだ日は中天を越したばかりと高く、文緒が警護の任につくような時間ではない。だが昼間から、この屋敷には石上中納言が訪ねていた。

阿部大臣と同じく、石上中納言もまた竹姫に求婚している一人だった。中納言殿について、文緒が知っているのはそれだけだ。だがどういうわけか、文緒はその中納言から呼びつけられ、こうして尋問を受けている。文緒はこの展開にまったくついていけていなかった。

そもそも、「佐貫殿が呼びだ」と言われてここに来たのだ。何か雑事でも言いつけられるのだろうと思っていたが、まさか貴人の前に引き出されるとは思っていなかった。

何か高貴な方の目に留まるほどの粗相をしてしまったのだろうか。文緒は近頃の自分の行いを急いで思い返したが、見当もつかなかった。

佐貫はもったいぶって言った。

「こちらにいらつしやる石上中納言様は、竹姫様とご婚儀を上げられる予定の御方だ」

「」

文緒の息が止まりかけた。思わず、ぴくりと肩が跳ねる。

「だがその証しに、竹姫様は『燕の子安貝』をご所望なのだ。お前、その宝について知っていることを申せ」

つまりは、中納言もまた他の婿候補者と同じように、難題をぶつけられたのだ。文緒はゆっくり息を吐き出して、肩の力を抜いた。佐貫の言い様ではまるで、婿殿は中納言に決まったかのようだ。だが、中納言殿の手前そう言っただけで、実際のところは違ふのだらう。

「燕の子安貝」とは、今回もまた大層な難題だ。そしてやはり、懐かしい。ほっとしたせいか気が緩んで、文緒は口の端だけで苦笑した。顔を伏せているので、前のように見咎められることはない。

そのことが有り難かった。

「許すと言っているのが聞こえぬか。顔を上げよ。疾く申せ」

先程の甲高い声が、苛立ったように急かした。文緒は迷った末に、ゆつくりと顔を上げ、簀子の上を仰ぎ見た。

勾欄の向こうから、佐貫が冷ややかにこちらを見下ろしている。

その他は誰の姿も見えなかった。件の中納言は、奥の底にでもいるのだろう。ここから姿が見えるのは佐貫だけだというのに、何人もが自分に注目しているような、肌に突き刺さるほどの気配を文緒は感じた。

「……」

けれど依然、どう答えてよいものかわからず、文緒は黙ったままだった。

なぜ中納言が、自分に「燕の子安貝」のことを尋ねるのか。それがわからなかった。

文緒は宝など一つも見たことはないし、燕や貝についても詳しくなどない。中納言ほどの身分であれば、もっと見識の広い人物をいくらかでも知っているだろう。それなのに、なぜ文緒などに訊くのか。その意図がわからなかった。

「燕の子安貝」という言葉自体は、知っているものだったが、それを素直に語っていいとも思えなかった。

「佐貫よ。そやつは本当に知っておるのか？」

沈黙し続ける文緒に苛立ったのか、高い声が不審げに問う。佐貫は奥に向かって、深々と頭を下げた。

「はい。その文鷹と申す者は、先日竹姫様が阿部大臣様にご所望になった『火鼠の皮衣』のことを、存じておったのです」

文緒はぎよつとして、思わずまじまじと佐貫を見つめた。



体、何のことを言っているのだろうか？

佐貫はこちらを一瞥もせず、奥の中納言へ淡々と続けた。

「『火鼠の皮衣』を知るなら、どうして『燕の子安貝』を知らないことがありましよう。大臣様にはその秘密を耳打ちしたというのに、どうして中納言様には申し上げられないことがありましようか」

「空言だということもあるではないか」

「さて」

佐貫はそこでちらりと文緒を見下ろした。目を細め、文緒だけにわかるように笑う。

嘲りの笑みだった。

「その時は、この賤しい者を相応しく裁かねばなりますまい。ですがよもや、知らぬということはないでしょう。皮衣を知らぬと言った私を、これは笑ったのですから」

覚えておれ。

憎々しげに佐貫が吐き捨てた言葉を、文緒はやつと思いつ出した。むき出しになった悪意に、ぞつと血が引くような思いがした。

「火鼠の皮衣」に思わず笑ってしまい、それを佐貫に見られて憎まれたのは、ほんの三日ほど前のことだ。佐貫はそのことを、思った以上に深く根に持っていたらしかった。

これは、報復なのだ。文緒ははっきりとそう悟った。

いつの間にか、文緒は阿部大臣には協力した事になっている。黙っていることも、何か言い逃れすることもできない状況が、佐貫によってつくられていた。

文緒が「燕の子安貝」を知っていると答えようが、知らないと言

えようが、空言であると咎めるつもりなのだろう。文緒よりも佐貫の言葉が重んじられるのは明らかだ。そして中納言まで巻き込んだ以上、罰は重くなる。

佐貫は「燕の子安貝」などありはしないとわかっていて、この状況をつくつたのだ。文緒を罠にかけるために。

「では答えよ。『燕の子安貝』とは、どこにあるのだ？」

甲高い声が、高圧的に降ってきた。袋小路に追い詰められたような思いで、文緒の背を冷たい汗が伝った。

#### 四（下）

「燕の子安貝」などありはしない。だがその言葉を、文緒は知っていた。正確には、その謎かけを知っていた。

「『燕の子安貝』は、どこにあるか？」

捨てられ、山の中を放浪していたいつかの夜に、文緒はその話をしたことがあった。

「……子安貝って何？」

共にすごしていた子どもは、眉をきゅっと寄せて首を傾げた。

海を知らぬ文緒は、本物の子安貝を見たことなどない。この子も同じなのだろう。文緒もどんな物なのか上手く思い描けず、母からの受け売りを、見てきたように語ることしかできなかった。

「卵みたいな丸い貝で、珍しい宝物の一つだよ。あと、子宝のお守りなんだって」

「『燕の』ってことは、燕の巣にあるんじゃないの？卵みたいに、燕が産むんでしょ」

くるりと目を回して、その子は不思議そうに言った。考え込むその仕草は、やはり幼い弟にそっくりだ。文緒は懐かしくて口元を緩めた。そうして微笑もうとすると、二人で話す時以外あまり動かない頬の肉が、引き攣れてぴきりと痛んだ。

夜にお伽噺をすることは、文緒とその子の決まりごとになっていた。

日のある明るいうちは、ほとんど黙りこくって山道を歩く。ひもじさは草の茎を噛んで誤魔化し、喉の渴きは岩窪にたまった雨水をすすってしのいだ。ふらつく足で少しずつ進み、夜は疲れ果てて、

木のうろや岩かげにうづくまつて眠った。その眠りに落ちる僅かな間で、身を寄せ合ってお伽噺を語るのだ。

文緒は首を振って、その子が出した答えを否定した。

「悪し。燕は子安貝なんか産まないよ」

「わかつてるよ。でも、『燕の子安貝』って言うから」

その子は不満そうに唇を尖らせた。

そう、文緒の言うことは矛盾している。だがそこが、謎かけなのだ。

「答えはなあに？早く教えてよ、お兄ちゃん」

文緒の汚れた衣の端を引っ張って、子どもはせがんだ。

数日一緒に過ごして、この子のはきはきした子なのだということを、文緒は知った。

素直で率直な子だ。特別わがままでも堪え性がないわけでもないが、この子は自分が何をしたいかちゃんとわかっていて、それをはっきり文緒に伝える。自分の望みに疎くて、口の重い文緒にとって、とてもうらやましい性質だった。

疲れたら休みたいと言い、眠たくなればお伽噺の途中でもすくと寝てしまう。自分にはないその素直さに文緒は戸惑ったが、同時に小気味良くもあった。

だがこの子は、「家に帰りたい、お母さんに会いたい」とは、もう二度と言わなかった。

「燕の巣を探しても、子安貝はない。つまり、無駄なことだ」

答えを話しながら、文緒は密かに久しぶりの優越感を味わった。

謎かけの答えを知る者だけが味わえる、ささやかな優越感だ。

「『燕の子安貝』なんてない。探しても無駄だ。つまり『かひなし』。わかる？」

子どもはきよんとしたが、ややあつて答えを理解したのか、「

なあんだ」と眉を緩ませた。

「『燕の子安貝』なんて、ないんだ。つまんない」

ふてくされたように言うので、文緒は少し慌てた。この謎かけはおもしろくなかっただろうか。

「まあでも、誰も探したことはないから。本当にかどうかはわからないよ」

「じゃあもしかしたら、『かひあり』かも？」

その子がおもしろそうに微笑んだので、文緒もほっとした。

「うん。そうだったらおもしろいね」

「『燕の子安貝』は、ありません」

長く迷った末に、文緒はそう言った。

「……私は、そうとしか存じ上げません」

文緒は深々と平伏した。目を閉じて、沙汰を待つ。文緒が言えるのはこれだけだった。

案の定、頭上からは怒りに裏返った声が飛んできた。

「佐貫！やはりこやつは宝のことなど、知らぬのではないか！」

「この者に縄をかけよ。虚言によって中納言様を惑わせた罰じゃ」

佐貫は手を打ち、大声で命じた。

すぐさま脇から侍らが駆け寄ってきて、文緒を地面に引き倒し、頭を押さえつける。あまりにも素早く、文緒が何かをする隙もなかった。

やはりこれは最初から、準備されていたことなのだ。

固い地面に強く押しつけられ、身動きはおろか息さえできなかった。文緒は苦しさに呻きながら、かろうじて顔を動かし、息を吸お

うとした。

視線を僅かに上げれば、佐貫の姿が見える。簀子に立ち、文緒を見下ろしている。

嘘ではない、と言うこともできた。これは謎かけなのだから、「燕の子安貝」はない、「かひなし」で正解なのだ。

だが、どうしてもそこまで教える気にはならなかった。自分を見下ろし、笑う佐貫に、答えを教えてやるのは嫌だった。

淡い優越感などありはしない。それはただの、文緒の意地だった。「柱に括りつけ、竹の鞭で打て。その後のことは、追って沙汰しよう」

そう命じてから、佐貫は階<sup>きやうはし</sup>をゆっくり下りて、地べたに倒れ伏す文緒の前に立った。

屈みこみ、文緒の髪をむんずとつかむ。無理やり頭を持ち上げられる痛みで、文緒はまた呻いた。

「今度こそこの屋敷から追い出してやる。汚らわしい下郎め」低い、文緒だけに聞こえるような、押し殺された声だった。

「お前は疫病神だ。いるだけでお館様のお心を悩ませ、煩わせる」ひたりと、視線が合わさる。佐貫の眼差しはじつとりと暗かった。「大方、お館様を騙してこの屋敷に入ったのだろう？疎まれるわが身を省みて、疾く去るがいい」

佐貫は文緒の頭を地に叩きつけるように手をはなした。頭を打った衝撃で目に火花が散る。だが文緒は瞬いてそれを払うと、佐貫を睨みつけた。

腹の底に火がついたかのような怒りが、かっとかみ上げた。

「……違う」

くいしばった歯の隙間から、文緒はそう言った。

主人を騙してこの屋敷にいるのではない。文緒がここにいるのはそんな理由ではない。

どれだけ疎まれ、憎まれたとしても、文緒はここから絶対に去らない。

佐貫の憎しみのこもった目つきに、文緒も同じだけ怒りをこめて睨み返した。

何も知らないくせにと、吐き捨ててやりたかった。だがそれは、許されないことだ。

先に視線を別の方へ向けたのは佐貫だった。立ち上がり、何事もなかったように「連れて行け」と命じる。腕を後ろへねじり上げられ、引きずられるように文緒は運ばれた。

厨の脇へ引っ張り込まれて見えなくなるまで、文緒はずっと佐貫を睨み続けた。

#### 四（下）（後書き）

【蛇足】「かひなし」の掛詞：「貝なし」と「甲斐なし（無駄だ・取るに足らない）」



## 五

雨垂れが軒を打つ微かな音が聞こえる。

文緒は目を閉じて、高い熱に夢と現の境をふらふらと彷徨いながら、それに耳を傾けていた。

厨に近い、薪と藁が山と積んである小屋に、文緒は寝かされていた。

藁に埋もれるようにしてうつ伏せ、破れた薄い小袖を衾がわりに被っていた。地から這い上る肌寒さは身に堪えたが、それでも雨を防ぐ屋根と、冷気の広がらない小屋の狭さがありがたかった。

鞭打たれた背はまだ熱を持ち、それは体全体に飛び火して文緒の意識を混濁させている。手当ては滲んだ血を拭った程度で十分ではなく、どうにか自力で巻いた布も、億劫で取り換えていない。背が燃えるように痛いので仰向けになることができず、身動きすることすら辛かった。

覚めているのか眠っているのか、もはや自分でもわからなかった。厨番だろうか、この小屋にも誰かが出入りしていたようだったが、記憶は曖昧でぶつぶつと途切れていた。

高い熱で朦朧とする感覚は、文緒にとってひどく懐かしいものだった。体が重く、思い通りにならない無力感、幼い頃によく味わっていたものだ。

母のひんやりした手が額を撫でた気がした。かと思えばその感触はすぐに遠くなり、暗闇に消える。弟が心配して文緒の顔を覗きこんでいる。それはすぐに、共に山道を彷徨ったあの子の顔になり、最後には怒りに歪んだ佐貫の顔になった。

「ここから出て行け、疫病神め」佐貫が文緒をずるずる引っ張り、

屋敷から追い出そうとする。文緒はその手を振り払おうとしたが、できなかった。手を引く男は、母に頼まれて、文緒を山に捨てに行くのだ。仕方ないことだ。珍しいことでもなかった。もう一方の手には、僅かな米の入った袋。「怨むなよ」と言った彼も、飢えていた。

暗い山道は恐ろしかった。ただ、あの子の手の温かさだけが救いだった。怖いことのないように、二人でお伽噺の中で遊ぶのだ。あの子が目を輝かせてくれるのが嬉しい。「でも、もういいの。何もいらないよ」どうして泣くのかわからない。月には、何の悲しみもないはずなのに。

「おい、生きているか」

いくつかの断片的な夢を見ていた文緒は、その声と共に揺り起こされた。

ぼんやりと目を開けると、こちらを覗きこんでいる黒い影が目に入った。視界は薄暗い。目が霞んでいるのか時刻だからなのか分らず、文緒は数度瞬きをした。

傍らにいる人物の顔は見えない。だが、その声には覚えがあった。

「男鹿……？」

「お、生きておるようだな」

男鹿は笑ったようだった。文緒は痛む背を庇いながら、どうにか身を起こした。

いくらか気分がましになっていることに気づいて、額を押さえて息をなく。汗で着物がはりつき、それが不快だった。

「寝ておつても良いぞ。様子見ついでに飯を持って来てやってただけだ」

男鹿は無造作に、文緒の横に胡坐をかいて座った。ほれ、と竹の皮にくるまれた握り飯を差し出す。文緒は礼を言つて受け取ったが、

まだ食べる気にはならず、そのまま膝の上に置いた。

「中納言殿に無礼をはたらいた罰としては、まあ、それで済んでよかったな」

軽く言われて、文緒はちらりと男鹿に目をやった。

夕闇の薄暗さにも大分目が慣れてきた。少し目をこらせば、近くにいる男鹿の表情も見える。男鹿はにやにやと笑い、問うように首を傾けた。

「百叩きの上、放り出されるのかと思ったが。不思議だなあ」  
「……」

文緒は黙ったままでいた。正直なところ、追い出されなかったのは文緒にとっても意外なことだった。

中納言を騙した罰として、文緒は鞭で血が滲むほど背を打ちつけられた。おかげで背の皮は裂け、腫れ上がっている。だが、それだけだった。

罰としてはひどく中途半端で、軽いといってよかった。佐貫はあれほど追い出すと息巻いていたのだが、どういうわけかそうはならなかった。騙りの汚名はそのまま、傷の手当てをされたわけでもない。それなのに、積極的に叩き出されはしなかった。後はどこへなりとも行けというように、ここに放置されている。

佐貫の情けであるはずがない。では、何故なのか。文緒にとっても、それが不思議だった。

「寝込んでおつても、誰の見舞いもないとはな。気の毒なことだ」

薪小屋をぐるりと見回して、男鹿はふんと鼻で笑った。

「お前、それほど嫌われているのに、ここから出て行かんのは何故だ？」

顎の髭を撫でながら、男鹿が訊く。単純に、面白がっているような声音だった。

「叩き出されなかったのも不思議だが、お前が逃げ出さないのも同じくらい不思議だ。……わしならこんな目にあえば、この屋敷などすぐに出て行くが。他に雇い入れてくれる屋敷など、いくらでもあるに」

やはり変わり者だと言われているようで、文緒はふいと顔をそむけた。

追い出されないのは、文緒にとって僥倖だった。だがそれと、文緒が出て行かない理由は別だ。

文緒が自分からここを出て行くことはあり得ない。何をしても、岩にかじりついてでもこの屋敷から離れない。文緒はそう決めている。

そしてその理由を、男鹿に語ろうとは思わない。

「……外では何か、変わりはないか」

答えるかわりに、文緒はぽつりとそう問い返した。男鹿は虚をつかれたように、きょとんとして数度瞬いた。

「……あ、ああ、そうだな。お前が騙くらかしたとかいう中納言殿だが、高い所から落ちて大怪我をしたらしいぞ。何でも、燕の巣にある子安貝を探していたとか」

馬鹿馬鹿しい、と男鹿は鼻を鳴らした。

文緒や男鹿でさえも、「燕の子安貝」などありはしないとわかるのだ。それなのに、教養ある貴人がわからないとは、何ともおかしな話だった。だがその高雅な目を曇らせ、露の幻を追わせるのが、「雲居の方」の美しさなのかもしれない。一目見てしまえば、世の男は正気ではいられないのだろう。

あるいはそれが、「恋」なのかもしれない。

「中納言殿は寝ついてしまい、竹姫様との縁談も流れてしまったそうだ。……まあ、こんな難題をふっかけられる時点で、望みのない縁談だったのだろうか」

ぼんやりとつい考えこんでいた文緒は、その言葉で引き戻された。「……そうか」

文緒は膝の握り飯に目を落とした。喜ぶな、と自分に言い聞かせたが、胸にほっと安堵が広がるのを止めようがなかった。

「そんな目にあつたというのに、忠義者だな。屋敷のことが気になるのか」

やれやれ、と男鹿は呆れたように肩をすくめた。

本当に忠義だろうか、と文緒は思う。

たつた今、姫様の縁談が流れたことを聞いて、安堵したのではないのか。主の不幸を喜んだのではないか。それを果たして、忠義と呼べるのだろうか。

本当の忠義者というのは、もしかしたら、文緒より佐貫のことなのかもしれない。ふとそう思った。佐貫が文緒を追い出そうとするのは、個人的な好悪もあるだろうが、第一は主人のためだ。主人が文緒を忌み嫌うのに、倣っているのだ。

そんな思いに捕らわれながら、文緒はぼんやりと答えた。

「……屋敷を警護し、姫様を守るのが私の役目だ。御身に変わりがないか、不埒者が近づきなどしてないか、気にかけて当たり前だろう」

そう言って、文緒は握り飯を一口頬張った。熱のせいで味などせず、噛むのにやたら力が必要だったが、体を戻すためには食べなければならぬ。文緒は二口、三口と続けて齧りついた。

「……なるほど」

膝に頬杖をついた男鹿が、妙にしみじみと言った。

「少し、合点がいった気がするぞ。お前の忠義は、この屋敷に向かっているのではない。」

「雲居の方」様に向かっているのだな」  
ぐつと、飯が喉に詰まりかけた。文緒は咳きこみながら、顔を上げた。

「それで、ここから離れられないのか」

「……」

口を押さえて、文緒は咳で答えを誤魔化した。男鹿がまた、傍らからひよいと竹筒を差し出す。有り難く受け取って、喉に冷たい水を流し込んだ。

「……見たことがあるのか、『雲居の方』を」

男鹿が静かに問いかける。文緒はすぐに「いや」と首を振った。

「まさか。姫様は、住む世界が違う」

天女のように美しい姫。遙か遠い「雲居の方」だ。文緒の手が届くはずもないし、垣間見られるわけもない。

まさに月のようにだと、文緒は思った。美しさも、その遠さも。

男鹿は意外そうに、「へえ？」と眉を上げた。

「てつきり、何かの弾みに姫様を見たのかと思った。それで姫の美しさに取り憑かれて、忠誠を捧げているのだと」

「違う」

文緒はまた首を振った。だが男鹿は納得いかなさそうに、ふむと顎を撫でた。

「それ以外、理由が思いつかんのだが。お前が、『雲居の方』に恋しているのだという以外に、理由があるのか？」

「恋では、ないだろう」

文緒は目を伏せた。

「恋」とはおそらく、阿部大臣や石上中納言のようなことをいうのだ。美しい天上の月を追い求め、供物を捧げ、手を伸ばす。だとすれば、文緒の中にあるのは恋ではなかった。

文緒は美しい「雲居の方」を見たことはない。捧げられる供物もない。かの人を、追い求めようなどとは思わない。

ただ、なるべく近くがいいと思って、せめて守る役目でありたいと思って、ここにいただけだ。

きつと、ただ独りよがりなだけだろう。

「わからんな。恋ではないなら、忠義を捧げて何になる？」

その問いに、文緒は答えようと唇を動かし、そのまま言葉を失った。

答えなかったのではない、答えられなかったのだ。胸の内に、答えはなかった。そこはぼっかりと空白だった。

文緒がここにいるのは、約束だからだ。それは揺らがない。

けれどそれは一体、何のために、誰のためになっているのだろう。文緒は自問し、瞳を揺らがせた。何のためになるのかなど、考えたこともなかった。

ここに居続けることの意味を、考えなくなってどれくらい経つのだろう。

「……まあ、お前の勝手だろうが」

男鹿はそう言うのと、膝を払って立ちあがった。伸びをするように軽く腕を伸ばし、何気ない口調で言う。

「恋ならば、やめておけと言っただろう。お前が言っただ通り、住む世界が違うのだ」

声は軽いのに、その言葉は何故かひどく真剣に響いた。不思議に思っ、文緒は顔を上げた。

暗がりに沈んで、男鹿の顔は窺い知れない。だが少なくとも、笑ってはいないと思った。

「身分違いの恋など、目も当てられない」

男鹿が去って、文緒はただ一人暗い小屋に残された。

体はだるく休息を求めていたが、文緒はしばらく身を起こしたままでいた。じつと身じろぎもせず、男鹿の残した問いを考えていた。



## 六（上）

文緒の熱は翌日には大方引き、その次の日には、痛みをおして警備に立つことができた。

もとの雑舎に戻って来た文緒を、他の侍らは何事もなかったかのように迎え入れた。正確には、文緒をまるでいないかのように扱った。

傷は大丈夫かと声をかける者も、事情を聞こうとする者もない。文緒が近づけば、皆気まずそうに目をそらした。逃げるように距離を取る者もいた。もともと親しい仲間などいなかったが、あまりに露骨な態度に戸惑ってしまふほどだった。

男鹿もあれ以来、声をかけてくることはない。見舞いに来たことなどなかったように知らぬ顔をして、皆と同様に文緒を遠巻きにしている。もしかしたら侍たちは、佐貫から何か言い含められているのかもしれない。

そんな状況を、文緒はただ淡々と受け止めた。

下人時代から、一人で過ごすことには慣れている。屋敷の主から疎まれている文緒に、近づく者はいなかったからだ。

文緒を気にかければ、巻き添えをくらって主の勘気に触れてしまうかもしれない。そんな警戒心が皆に働き、いつも文緒をぽつんと孤立させた。親切に声をかけてくれる者も、文緒の疎まれようを知り、やがては離れていった。

心を許し、語りあうことなどなかった。言葉を交わすとするれば、温度のない仕事の言つてや用事ばかりだった。

文緒の淡々と静かな、相手と距離を取る物言いや態度は、こうした日々の中から学んだものだ。

だが、改めて遠巻きにされることは、思った以上に文緒の胸にこたえた。

一人は平気だ。平気だが、どうしてもむなしかった。

この屋敷に来て、もう十年にもなる。

十年ここで生きてなお、自分を繋ぐ絆を作れなかったのだと思うと、ずっしりと重い徒労感が襲った。今までも、これから、自分は一人なのだろう。自分という存在が、風に舞う根なし草のように、軽いものに感じられた。

文緒はここにいるが、ここは文緒の居場所ではないのだ。その空虚さが、胸の内を淋しく冷やした。

文緒をここに繋ぎとめるものは、絆や縁ではなく、古い約束と小さな意地だった。他には、何もなかった。

文緒はこの屋敷に来て、仕事を得、日々の糧を得た。飢えることがなくなつて、丈夫な体を得た。

それなのに未だ、先の見えない暗い山道を歩んでいる気になるのは何故だろう。今の方が孤独だと、感じるのは何故だろう。

そんな思いは、背中の痛みと共に、文緒の気を滅入らせた。

その夜は月が出ていた。僅かに丸みを欠いた、いよいよ満ちるのを待つ、十三夜だ。

文緒はその月を、東の棟近くで見ている。

月は冴え冴えと明るく、屋敷の庭を白く照らしている。篝火を焚かずとも良いほどだった。

前栽の葉一枚一枚が妙にくっきりと見え、小さな池は磨かれた鏡のように静かに、天上の月を映している。風も凪いで、ただ鈴を振

るような虫の音だけが響いていた。雲の上のように、どこか現とは思えない光景だった。

いけないと思いつつも、文緒はぼんやりとそれを眺めていた。体調は大分いいものの、未だ本調子とまではいかない。物思いもあって、いつになく警護に身が入っていなかった。

本当なら文緒と共にこの場所を受け持つ侍がいるはずだったが、周りには誰もいない。徹底して避けられているのだと思ったが、今はどうでもよく、むしろ有り難いとさえ感じた。美しいこの光景を、誰にも邪魔されずに一人で眺めていたかった。

文緒は月明かり誘われるように、南側へ歩き出た。館に邪魔されないところで、もっとよく庭を眺めようと思ったのだ。

微かな音がしたのはその時だった。

背後でかたりと音がして、文緒ははたと足を止めた。慌てて振り返る。ふらふらと歩いて、警護を怠っているところを見咎められたら、今度こそ追い出されてしまうかもしれない。あの日文緒を見下ろした佐貫の顔が、さっと頭をよぎった。

振り返った先、屋敷の東に面した半蔀が一つ、何故か上げられていた。蔀戸は、朝には日の光を取り入れるために上げるものであるが、いつもなら夜は風を入れないよう、上下ぴたりと閉じられているはずだった。不審に思つて、文緒はそちらに一步近寄った。

半蔀の奥に垂らされている御簾が、かざりと揺れる。誰かが、その向こうにいるのだ。文緒は眉をひそめ、どうすべきか逡巡した。

怪しい者が忍び込んだのなら、大声で呼ばわつて、すぐに取り押さえねばなるまい。だが、東の棟は屋敷の最奥だ。ここに出入りするの、この屋敷でも主の近くに侍るような身分の、限られた者たちしかない。そのような人を不審者扱いしては、今度こそ文緒の

首が飛ぶだろう。

文緒は怪しげな半部の方へ慎重に近寄って、御簾の向こうの人影の様子を、息をひそめて見守った。

簀子の陰に身を隠そうかとも思ったが、あえて姿を見せるように立った。文緒からは御簾の中の人物は見えないが、中からは文緒が見えるだろう。不審者ならば慌てて逃げようとするはずだし、屋敷の誰かなら文緒のことなど問題にしないはずだ。

その反応を見極めようと、文緒は目を凝らした。

だが、御簾の向こうの人物は、そのどちらの行動も取らなかった。御簾が一度、大きく揺れた。次の瞬間、その隙間からずっと、白い指先が伸びた。

「文緒　！」

驚きに満ちた、だが抑えられた声と共に白い顔が覗いて、文緒は動けなくなった。

## 六（下）

その人がもどかしげに御簾を押しつけ、はめ込まれた下の半部を掴んで身を乗り出そうとするのを、文緒は呆然と見ていた。思いつめた苦しげな表情で、こちらに手を伸ばす。月に照らされるその人の顔は、とても美しかった。

紅葉色の衣は、月明かりの下ではどこか褪せて見えた。小袖の上にその単衣をはおっただけのその姿は、頼りなげでやけに小さい。だがその人はなお、内側から輝くようだった。

小ぶりの瓜実顔はみどりなす黒髪に縁取られ、頬と唇はみずみずしくふわりと紅い。顔立ちにはまだやさしい少女の風情を残しながらも、既に洗練された、匂い立つような色香があった。伸ばされた指先は小さく細工物のようで、触れていいものとは思われなかった。これほど美しい人を、文緒は見たことがなかった。

だが確かに、幼い日の面影はあった。

月の下で笑う遠い日の幼子が、今まさに十年の時を超えて、姫君に重なった。そのことに文緒は息をのんだ。堰き止められていた年月がどつと押し寄せ、足元が揺らぐようだった。

「雲居の方」様だ。誰に聞かずとも、文緒は雷に打たれたようにそうと知った。

それは瞬きの間であつたが、永遠のようにも思われた。長い一瞬が過ぎ去った後、文緒ははっと我に返り、すぐにその場に膝をついた。

姫ならば、顔を見て良い相手ではない。文緒は低く頭を垂れた。

「文緒……」

雲居の方の、押し殺した囁き声がした。

「そこにいるのは、文緒ね？お願い、もしそうなら、何か言って…」

懇願するような声に、文緒は唇を噛んだ。

文緒が顔を見て良い相手ではない。話しかけて良い相手ではない。自分にそう言い聞かせ、ぐっと押さえつけていなければ、すぐにも立ち上がってしまいそうだった。真つすぐに顔を見て、確かに自分だと、呼び声に答えたかった。

呼び声に答えて、そうして自分も、名前を呼び返したかった。

湧き上がる望みは息がつまるほど激しく、文緒自身が驚くほどだった。すべてを水泡に帰してもいいから、今ここでの人にこたえたいと、胸の中で暴れるものがある。

地についた手が震えた。これほど何かを切望する熱が、自分にまだあったことに文緒は驚いた。

淡々と期待を殺し、心を無にして過ごす日々の中で、それは失われたのだと思っていた。

「……月を見ようと思ったの」

雲居の方はぽつりと、言葉を落とした。その声は布越しのように、ぼつとくぐもって震えている。泣いているのかと、文緒の胸はまたざわついた。

「葎を開けて、一人にしてみると……。お母様は、いい顔をしなかったけれど」

でも、と姫は続けた。

「あなたに会えるなんて。……こんなことが、あるのね」

本当に、と文緒は心の中だけで頷いた。

会うことはないと思っていた人だ。望みなど持ちようもなく、遙か天上の月のように、住む世界が違うのだと思っていた。

これほど近くにいるということさえ、忘れていた。

「どれほど会いたいと思っていたか……。お願い文緒、声を聞かせて」

重ねて願う声に、文緒の心は揺れた。

こたえてしまおうか、と迷う自分がいる。

「雲居の方」と口を聞けば、ここにはいられない。それはずっと昔にした契約だった。

けれどもう、この屋敷に居続けることに何の意味があるのだろう。疎まれ憎まれ、空虚さに心を侵され、何が得られるのだろう。

約束を果たすことができなくなるけれど、この夜に、この方に会うことができただけで、もう十分だという気がした。今までの日々の中で、文緒はこの方に何もして差し上げられなかった。そばにいたいとこの屋敷に執着したのは、ただの独りよがりだ。

そんなことを続けるより、今ここで、彼女にこたえることの方が、ずっと大切ではないのか。

けれど文緒は、顔を上げることができなかった。

ぐっと、砂を掴む。迷う心とは裏腹に、何か大きなものに頭を押さえつけられているかのようにだった。

彼女は「雲居の方」様だ。踏み越えることのできない隔てが、文緒と彼女にはあった。

手を繋ぎ、隣で歩いた幼い日は幻のように遠い。今や二人の道は大きく分かれ、まさしく天と地ほどに隔たった。

雲居の方はその美しさが天下に鳴り響き、やんごとない方々からの愛を乞う文が、日ごと降るように舞い込んでいるという。方や文緒は、吹けば飛ぶような身の上だ。比べようもない、厳然たる差が、二人の間には横たわっていた。

文緒が不用意に近づくことで、彼女の何かが傷つき、損なわれでもしたら。そんな恐れが浮かんで、言葉を返すことができなかった。矛盾する心に引き裂かれてしまいそうだった。

呼び返す彼女の名は、もう喉元までこみ上げてきているというのに。

「……私が誰か、わからない？文緒、あなたは」  
姫はそこで、息をのむように言葉を切った。そして、一層鋭く声をひそめる。

「誰か来るわ。……もう、行かなくては」  
文緒は弾かれたように顔を上げた。

この思いがけない邂逅は、あっけなく終わろうとしていた。葛藤は煙のように消え去り、苦い後悔がどつと襲った。

またとない機会を、文緒は失うのだ。何もできず、ただ迷っただけで。彼女の姿を、もう二度と見られないかもしれないのに。

誰かが来てしまうなら、もう文緒が口を開くこともできない。この場を見咎められては、文緒だけではなく彼女にも害が及んでしまっただろう。主家の姫と下人など、知りあうはずのない二人なのだ。

「文緒、もし、私の名を覚えているのなら」

雲居の方は声をくぐもらせ、早口で言った。

「満月の夜に、『私の生まれた場所』に来て。……待っているから」



祈るような響きを落とし、姫は御簾の向こうへと姿を消した。微かな衣擦れの音がして、気配が去った。

文緒はしばらく跪いたまま息をひそめ、じっとその場に留まった。人の近づく気配がしないかと探ったが、声も足音も聞こえなかった。十分に時間がたつてから、文緒は立ち上がった。

開かれた半蔕に、かの人はいない。文緒は力なく顔を伏せた。

誰もいないこの屋敷の片隅に、ただ立ちつくす。つい今しがたの出来事なのに、もはや夢か幻かと疑ってしまうほどだった。

懐かしさも慕わしさも、燃えるように抱いた望みも、姫君が去った今は、泡のように消えていた。けぶるような尾花の穂を揺らす風が、胸の熱を冷ましていった。

目を閉じて、瞼に残った姫の面影を追う。

息をのむほど美しくなっていたのに、変わっていないのだと思った。芳しい香りも滑らかな絹の衣も、幼い頃にはなかったけれど、それらは付属品にすぎなかった。彼女の美しさは、そんなものではない。文緒はそれを知っていた。

満月の夜に、「私の生まれた場所」に。

文緒は目を開き、僅かに欠けた十三夜を仰いだ。

その場所の心当たりは、一つしかなかった。

## 七（上）（前書き）

この話には、一部「野ざらしの死体」に関する描写があります。  
該当箇所は、 に挟まれた部分です。

ご不快に思われる方は、大変申し訳ありませんが、該当箇所を読み  
飛ばす等のご対策をお願いいたします。

この件に関しては、4月14日の活動報告に記してあります。

## 七（上）

幼い文緒とその子がついに力尽きて動けなくなったのは、どこかの竹林の中だった。

足は文字通り棒きれのようになり、もう歩く気力も失せていた。体は疲れ果て、力が入らない。空腹で頭がぼんやりと霞み、全てを億劫に感じた。

二人は肩をくっつけて寄り添い、青々と伸びる竹にもたれていた。遙かな空には満月が雲間からのっそりと顔を出し、竹の葉をかきわけて白い光が降り注ぐ。文緒とその子は言葉もなく、それを仰ぎ見ていた。

夜の闇と月明かりは、文緒たちの黒く汚れた手足を上手く隠し、洗い流したように白く見せていた。だがやせ細った腕が本当に骨のように見えて、文緒はぼんやりと、同じだと思った。

住んでいた家の近くの河原にも、たくさんの骨が転がっていた。今の自分は、あの人たちと変わらないのだと思った。彼らも長い間雨風にさらされて、白い骨になったのだ。それは文緒のよく知る光景だった。

昔、まだ兄弟が生きていた頃には、その光景はとても恐ろしかった。白い骨と、まだ骨になっていない人々が転がる河原を見て、文緒は恐ろしくて飛ぶように家に逃げ帰ったのだ。そして母の袖にすがりついて、震えていた。母に背を撫でてもらって、怖いことは何もないのだと思えるまで。

けれど今は全て遠く、現実感がなかった。今や自分も、彼らと同じようになるのだと、淡々と思うだけだった。もはや逃げ帰る家も、すぎる袖もないのだ。

肩にかかる子どもの重みは、羽のように軽いものだった。その子は文緒の肩に額を預け、目を閉じていた。

眠っているのかもしれない。いや、もしかして。文緒はそつと、その子のこけた頬にへばりついた髪をかき上げてやった。そして、青白く見える顔をじつと注視した。

口元が動いて、薄い胸が僅かに上下する。まだ、生きている。文緒はほつと息をはいた。傍らの温かさには、まだ、命があるのだ。

けれど、この夜は明けないだろう。

文緒はうつすらと、それを予感した。自分もこの子も、朝日を見ることはない。じきに、小さなともし火は吹き消えるだろう。力の入らない体が、そう告げていた。

けれど、文緒には不思議だった。

暗闇も死も恐ろしいはずだ。それなのに、恐怖はなかった。恐ろしさは、肩に寄りかかる温かさが吸い取っているかのようにだった。寂しさも悲しみもなかった。

すごい、と文緒は思った。この子が怖い思いをしないように、文緒はお伽噺を語っていたけれど、いつの間にか慰められているのは文緒の方だったのだ。恐怖も寂しさもないのは、この子のおかげだ

った。

黄泉路へと旅立とうとするこの時に、一人ではないことが、ただ嬉しくほっと安心することだった。文緒はくたりと垂らされたその子の手を取り、感謝をこめてそつと握った。

子どもは瞼を震わせ、ゆっくりと目を開けた。

起こしてしまったかと、文緒は少し申し訳なく思った。その子はぼんやりと文緒の顔を見て、それから空を仰いだ。竹の葉の間からこぼれる月明かりが頬にさし、その子は眩しそくに目を細めた。

「……お月さま、まあいいね」

ぽつりともれた言葉に誘われるように、文緒も天を見上げた。

「……本当だ」

遙か遠くにかかる月なのに、やけに大きく見えた。うさぎの影の模様も、くつきりと見える。……あれをうさぎなのだと教えてくれたのも、母だった。

「ねえ、お月さまのお話、もう一回して」

天を仰ぐ子は、文緒の手を小さな力で握り返してねだった。

月の話、と文緒は頭の中を探った。そういえば前に一つ、話したことがあった。

「……黄金の月の宮の話？」

「うん」

その子はこくりと頷いた。本当は、話すことも億劫だったけれど、文緒は乾いた唇を舐めて話し始めた。

お伽噺もきつと、これが最後なんだろう。そう思えば、惜しむことはなかった。

「……月には、まばゆく輝く大きな宮があつて、満月の日には、そこで宴が開かれる。きれいな天女さまがひらひら舞って、笛と太鼓

が賑やかに鳴るんだ。甘い果物と、お酒と、ごちそうがたくさん並んで……」

今、あそこでその宴が開かれているのだろうか、文緒は黄金の月をじっと見つめた。

「そうして宴も終わる頃、月に住む仙人さまと天女さまは光の雲に乗って、下界に下りてくる」

その光の雲からは、艶やかな楽の音が鳴り響き、芳しい香りがするのだという。宴に飽いた月の人々は、下界を眺め遊ぶのだ。天上人にとっては輝かない黒い土も、黄金でできていない木々も、珍しくおもしろいのだろうか。

そして月の住人は、下界で見つけた佳人を、宴に招待する。

「よほど素晴らしい人でなきゃ、宴には招かれないんだ。……詩歌や管弦の才ある人とか、姿の美しい人とか。だから招かれるのは、すごく名誉なことだ」

けれど月は、地上とは違う。

「気をつけなければいけないのは、一度月に行ってしまうと、なかなか帰ってこれないこと。時の流れも違うから、注意しなくちゃいけない。地上に戻って来たときに、知り合いが誰もいないことになるから」

静かに文緒の話を聞いていた子どもは、少し首を傾けた。

「……お兄ちゃん、月に行きたいと思う？」

急に問われて、文緒は言葉に詰まった。

そんなこと、考えたこともなかった。

「わからない」

文緒は素直に答えた。そして逆に、問い返す。

「……月に、行きたいの？」

「うん」

その子はすぐに頷いた。迷いのない、真つすぐな答えだった。

「そんなにいいところなら、行ってみたい。……簡単に戻って来れなくても、いいから」

遠くへ思いを馳せるような口調だった。この子にも戻ることのできる場所はないのだと、文緒は思い知らされた。

進む先も戻る場所もない、二人が在ることを許されるのは、今の竹林だけだった。

輝く月の宮の下、そこに行くことを夢見て、二人は淡く微笑み合った。その子は無邪気に言う。

「一緒に行こうね」

「……うん」

文緒は小さく頷いた。

この子のようにひたむきに、月へ行きたいと思っているわけではなかった。でも、ついて来てほしいと言うのなら、共に行こう。

文緒を少しでも必要としてくれるのはきっと、この世でこの子だけなのだ。

## 七（下）

その子は安心したように、目を閉じた。うつむく青白い顔には、疲れが色濃く影を落としている。終わりの時は近いのだと、文緒は思った。

すぐ近くの地面の窪みに、小さな水たまりができていた。暗がりに沈んでいて見えにくかったが、水面がちらりと光の粒を映したので、それに気づくことができた。文緒は軋む体を起こし、その水たまりに近づいた。

これが、文緒がこの子にしてやれる、最後のことになるだろう。

文緒は黒く沈む水を、両の掌でそつとすくった。

水たまりは小さく、文緒の手では多くをすくい上げることができなかった。こぼさないように注意を払いながら、ゆっくり、膝を摺るようにして子どももの傍へと戻る。

月の光が真つすぐ降りそそぐ下に、手を差し伸べた。

「ほら、見て」

囁くと、その子は目を開け、ぼんやりと不思議そうな顔をした。

「なあに？」

文緒はその子に捧げるように、手を持ち上げた。

文緒の掌の中の水に、粒のような月が映っている。揺らめきながらも、確かに丸い形が見て取れた。それを覗きこんで、子どもは驚いたように息をのんだ。

「わあ」

手の中に小さな蛍を閉じ込めたかのようにだった。遥かな月の宮が



今、文緒の手の中に浮かんでいた。

文緒は笑って、手をその子の口元に近づけた。

「月をあげる。 黄金の宮へ、迷うことなく行けますように」

言葉には、心からの祈りを込めた。そっと手を傾けて、月を浮かべた水をその子の口に注ぐ。

黄金の宮は碎けて光の雫となり、子どもの中へと落ちていった。

唇を湿らす程度しかない水を、じっと味わうように子どもは目を閉じ、天を仰いだ。

月明かりを浴びて、小さな顔と細い首筋が、白く輝いていた。水がその喉を下り、体を廻って隅々まで行き渡るのが、文緒には目に見えるかのようにだった。深く息をすることに、その子の何かが急速に変わっていくを感じた。

睫毛が震えて、子どもの目がそっと開く。黒く丸い瞳が、うつとりと細められた。 今度は文緒が、息をのむ番だった。

「 ありがとう」

月を手に入れた子どもは、ふらつきながらも立ち上がった。そんな力が、どこに残っていたのだろう。呆然と見上げる文緒に向かつて、その子は大輪の花のように笑いかけた。

「月 is 甘いね。今まで飲んだどんな水より、おいしかった」

たった一口の水で、子どもの顔を暗く覆っていた死気が吹き飛んだかのようにだった。痩せこけたはずの頬はみずみずしく輝き、泥に汚れた髪は今や、黒く濡れたようなつやをもっていた。月の光が見せる錯覚なのだろうか、文緒は目を疑い、まじまじと見つめた。

白い光を領巾ひれのように身にまとい、その子は堂々と立っていた。まるで今、月から降り立った天女のような。月の光を従えて、輝く

ように美しい。

天女。そう、女の子だ。文緒は衝撃を受けて目を睜った。

驚くほどかわいらしい女の子だと、初めて気がついた。まだ幼い童女だが、磨けばいずれ玉のごとく光る美しい乙女となるだろう。そう思わせる萌芽があった。

今まで共に過ごしていたのに、どうして気づかずにいられたのだろう。信じられない思いだった。

子どもの顔には確かに、貧しさで染み付いた翳りがあった。それは、文緒には馴染みの翳りだった。自分も兄弟も、飢えた人々の誰もがもっていた翳りだ。日の下ではそれは誤魔化しようもなく顕わで、だから文緒は、弟のようだと思ったのだった。

けれど夜の闇が翳りを溶かし、月の光が泥の汚れを濯いだ今、この子の美しさを隠そうとするものはなかった。萎れた花が水を得てふつくと花弁を開く、それよりも速く劇的な変化を、文緒は目の当たりにしたのだ。

今までに語ったどのお伽噺よりも、驚くべき夢のような出来事だった。

「今なら、月の宮へも行けそうな気がする。不思議だね、なぜだがそれくらい、元気が出てきたの」

その子にはにかむように笑った。

きつと錯覚だ。まもなく力尽きる体が、儚い幻を見せているのだ。けれど、彼女に満ちる生氣は嘘ではなかった。弱り衰えた少女は死に、そしてまた生まれ直したかのごとく、別人のような輝きを手に入れていた。

「　ねえ、お兄ちゃん。名前を教えて」

につこり笑い、その子は文緒に手を差し伸べた。  
光の下その手を、文緒は呆然と見つめた。

名前　。　そうだ、文緒とこの子はこれまで、互いの名も知らず歩んできた。文緒は初めて、そのことに気づいた。

これほど近くにいて、弟のように思っていたのに、名すら呼んだことがなかったのだ。今まで、そのことに何の疑問も抱かなかった。互いしかいない、ひたすら暗い山道を行く日々の中では、名前など必要なかった。文緒は尋ねようとさえ思わなかった。

空つばをのみ、文緒は答えた。

「……文緒」

緊張で声はかすれた。恐る恐る伸ばした手を、その子はすくい上げるように取った。

「お兄ちゃん、文緒っていうんだね」

嬉しそくに声を弾ませ、少女はぎゅっと文緒の手を握った。

「ありがとう文緒。お話をしてくれたことも、月を溶かした水をくれたことも。今まで文緒と一緒にだったから、怖くなかったよ」

文緒はぼかんとしたまま、彼女を仰ぎ見た。

「わたしの名前は」

文緒は彼女の名を知った。その後長く胸中で呼び続けることになる、その名を。

そして、月からの使者が来た。

## 八

屋敷はなだらかな山を背に建っている。屋敷の者がただ北の山と呼ぶだけの、名もない丘陵だ。その一角は竹林となっていて、屋敷の主人の所有する土地であった。

竹林は自然に繁っているものではなく、きちんと管理されていた。太く良い竹だけを残して間引きをするので、竹林の中はよく日が差し込み、風がすずしく吹き通る。青々と高く伸びた竹はよくしなり、また色つやも良く、細工物に大変すぐれていた。

主人自慢の竹林だ。「竹姫」の名前も、ここからきていた。

もともと主人は、竹細工を売って身を立てた人だった。

今でこそ蔵が建つほどの財があり、屋敷は貴人のそれと肩を並べるほど広い敷地をもっている。だがそれは、ここ十数年ほどの短い間に主が勝ち取ったものだった。それまでには、長く苦勞の時代があったという。

若い頃の主は市に出向いて、地べたに敷いた筵に、自らつくった籠やびくを並べていた。声を張り上げ、道行く人々にそれらを売るのだ。その時代を知る者は、今では主自身と、長年連れ添った妻の二人しかない。

そのせいか、主の竹に対する思い入れは並々ならぬものがあつた。だからこの広い屋敷を造る時にも、よい竹のとれる竹林に近い、ここを選んだのだった。

文緒はその竹林に一人、立っていた。

警護の任の最中、こっそりと持ち場を離れて屋敷を抜け出したのだ。抜け出すのは、拍子抜けするほど簡単だった。

相変わらず、文緒の周りには誰もいなかった。おまけに雇われ侍たちがまだ知らないような小さな潜門を、文緒はよく知っている。誰にも見咎められることはなかった。

身の回りのものは、昨夜のうちに整理をつけてあった。ずっしりと肩に乗っていた重石がとれたような、どこかおぼつかない身軽さで、文緒はここにやって来た。

小高い場所にある竹林からは、屋敷を見下ろすことができた。母屋の薨が満月に照らされ、鈍く光っている。東西の門近くには今夜も篝火が焚かれ、夜通しの番をする侍たちの影が動いているのが見えた。

明るい火の傍にいる侍からは、こちらの竹林は暗闇に沈んでよく見えないはずだ。それでも文緒は用心して、竹の影に隠れるように身を寄せて、屋敷を見下ろしていた。

少し離れた位置からこうして見渡すと、屋敷の佇まいはどこかよそよそしく感じられた。これまで長い間、あそこで働いてきたはずなのに、その実感は湧かなかった。まるで知らない場所のような気さえした。

整った白砂の庭も、立派な門構えにも、慣れた親しみを感じることはなかった。何の感慨も湧かないことに、文緒はむしろ戸惑った。

けれどそれは、文緒の心が既に、ここから離れている証しなのかもしれない。

一晩、文緒は眠らず考えた。悩み惑い、考えに考えて、そして腹を決めた。

昨晚とは違う、不思議と落ち着いた気持ちで、文緒はじっと待っていた。

……待ち人は、本当に来るだろうか。それは賭けでもあった。

「文緒　！」

落ち葉を踏む軽い足音と共に、息をのむような声がした。文緒はゆっくりと、声のした方を振り返った。

おぼつかかなげな足取りで、細い道を上ってくる人影があった。こざっぱりとした簡素な小袖に湯巻をつけ、まとめ髪を布でくるんだその人は、一見すると風呂焚きの下女のように見えた。

けれど近づけば、見紛いようもなかった。

身に纏うものが変わっても、彼女の美しさは変わらない。自ずから光り輝くような、その麗しさ。確かに、「雲居の方」だ。

水をたたえ潤んだ瞳さえ見て取れる、その近さに文緒は息をのんだ。吸い寄せられるように見つめてしまうのを、止められなかった。夢なのかもしれないと、彼女が目の前にいることをまだ信じられなかった。

「文緒、本当に、来てくれたのね」

息を弾ませ、姫は感極まったように口元を押さえた。文緒も同じ思いだった。

本当に、彼女は来たのだ。

それだけでもう、すべてがいいと思えた。文緒の中で、最後の心が定まった。

万感の思いを込めて、深々と頭を下げる。

「……お久しゅうございます」

そのまま、顔を上げることができなかった。交わりたいと思っていた言葉はどうしてかき消えて、頭の中には何も残らなかった。再び会う時を、あれほど思い描いていたのに。

姫は躊躇いがちに問いかけた。

「鞭打たれて、寝込んでいたと聞いたけれど……」

文緒は静かに頭を上げ、頷いた。

「もう平気です。……私のことを、お聞き及びだったのですね」

「ええ。あなたの話はいつも、人づてに聞いていたの」

姫はふと寂しげに微笑んだ。

「会えないのなら、せめて様子を聞きたいと……。あの屋敷の中にも、私のために動いてくれる者がいるから」

これも、と姫は麻の袖を撫でた。

「着物を用意して、密かに門を抜ける手助けをしてくれて……。この十年をかけて、私には支えてくれる人ができたわ」

だから今までやってこれたのだと、姫は言った。

しばし、二人の間にぼつんと沈黙が落ちた。

互いに、この屋敷で過ごした日々を思った。幼子が大人になるほどの長い、しかし刹那に過ぎたような年月を。

二人を取り巻く全てが変わり、道は分かれ、遠く隔てられた。もう会うことはない諦めていた。けれどこの夜に、顔を見て、触れあうことのできる距離にいる、その不思議を思った。

今日まで、姫がどう生きてきたのかを、文緒は曖昧に想像するこ  
としかできない。どんな道を歩んで、この人になったのだろ  
う。文緒はその年月の欠片が見えないかと、じっと姫の顔を見つめた。

「私も、貴女のことは、できる限り聞き集めておりました」

文緒は少し躊躇ったが、続けた。

「……大臣様や中納言様との、ご婚儀のお噂なども」

姫はさつと顔を曇らせた。

「……なんてひどい女だと、思ったでしょう」

うつむいて、姫は胸元できゅっと手を握りしめた。

「難題を押し付けて、尊い身分の方々を惑わせて。でも、誰のものにもなりたくなかった。今まで、流されるように身を任せて生きてきたけれど、それだけはどうしても嫌だったの」

あなたには聞かれたくない話だったけれど、と姫は力なく微笑んだ。

「私の望みはただ一つ。いつかまた、あなたに会うことだった」

文緒、と名を呼んで、姫はそつと手を伸ばした。桜色の小貝のよな爪のついた、その細い指先を、文緒はただ見つめた。

望めば簡単に、その手に触れることができるのだ。今、それほど近くにいる。

ぴくりと指が動いたが、結局文緒は手を伸ばすことはなく、また頭を垂れた。

手を取ってしまったら、別れを告げるのを躊躇ってしまう。

「私も、姫様にお目にかかれてよかった。最後に」

迷いが生まれるより先に、文緒はきつぱりと告げた。

「私は今日より、この屋敷を去ります」

姫が驚きに息をのんだ気配がした。文緒は目を閉じ、じっと返さ



れる言葉を待った。

約束したのにと、なじられるだろうか。けれど、もう決めたことだった。

姫に一目お会いして、そして去ろうと。

すう、と気を落ち着かせるように深く息をついてから、姫は静かに問いかけた。

「……どうしてか、聞いても良い？」

文緒はゆっくりと顔を上げた。けれど目は伏せたままで、答える。

「それが、お館様との誓約なのです」

## 九

十年前の夜、月の光を浴びて輝く彼女を見ていたのは、文緒だけではなかった。

あの夜、文緒が知ったばかりの名を口にするより前に、二人の背後でがさりと足音がした。

二人ははっと弾かれたように振り返った。疲弊し擦り切れた警戒心が、ぴりりとまた頭をもたげる。文緒はかばうように彼女を自分の方へ引き寄せ、目を眇めてじっと暗闇を透かし見ようとした。山の獣だろうか。それとも。文緒は、彼女を抱く手にぐつと力をこめた。

この子を、最期まで、守るのだ。

暗がりからよろよろと出てきたのは　白い髭を生やした初老の男だった。

予想もしない闖入者に、文緒はぽかんと口を開けた。驚きのあまり力が抜け、ふらりと眩暈がした。

こんな山の中に、人がいるなどとは思っていなかった。その男は、久しぶりに見る「大人」だった。それどころか、久しぶりに見る彼女以外の「人」だった。

一瞬文緒は、幻だろうかと思った。それほど信じられなかった。

だが、男は幻ではなかった。

籠を背負い、鎌を手にした男は、ぽかんと口を開いて立ち竦んでいた。驚きに見開かれた目は、彼女一人にひたりと定まっている。傍らの文緒になど、気づいてもいないかのようにだった。

「何と、美しい」

男は陶然と呟いた。

この人も、あの瞬間を見たのだ。文緒はすぐにわかった。この子が月の下で、生まれ変わったように輝く美しさを得た瞬間を。

男はごくりと唾を飲み込んだ。

「……竹の中に、天女がいらっしやるとは」

そして魅入られたのだ、この子に。

天女を帰したくないと、羽衣を奪ったお伽噺の男のように。

驚きと感嘆に満ちた男の目が、異様な熱を帯びるのはすぐだった。

私の家に来ないかと、男は言った。

家に来て、養女にならないか。突然の申し出に彼女は戸惑い、怖がって文緒の腕にすがりついた。

「あの人、なんだか怖いよ。文緒、逃げよう」

けれど文緒は、彼女を抱きしめ返すことも忘れ、呆然と男を見上げていた。

衝撃だったのだ。男がこの時に、ここに来たことが。

月の使者だ、と思った。

月の使者が、彼女を迎えに来たのだ。

奇跡だった。死ぬべき定めから彼女を救うため、月がこの男を遣わしたのだ。文緒は強くそう思った。

何も見えない暗闇に一条の光がさし、道が示された。文緒はそれをはっきりと見た。

彼女は、月の宮に招かれたのだ。

「あの人の家に、行かなきゃ」

文緒は、袖をひっぱる彼女の手を、そつと外した。そうして正面に向き合った。

手を離され、逃げようという言葉を柔らかに拒まれた彼女は、衝撃を受けたように瞳を揺らがせた。不安げに眉を寄せる彼女に、文緒は安心させるように微笑んだ。

「もう、暗い山道を歩かなくてもよくなるよ。……それに、あの人が君のお父さんになってくれるんだって」

「そんなの」

彼女は勢い込んで息を吸い、唇を震わせ言葉を詰まらせた。

胸に溜めこまれていた思いがあふれ、狭い喉につかえているのが見えるかのようだった。泣きだしそうな顔で、彼女は言った。

「私にはお父さんもお母さんもいるよ。……でも、私はいない子になったんだ」

彼女は強くかぶりを振った。

「もういいの。いらない子だから、お父さんもお母さんも、いなくていい」

「……どうして？」

今まで共に歩んできた文緒には、その言葉は真とは思えなかった。この子は、泣いていたはずだ。父と母を呼んで。必死に、助けを求めていたはずだ。

けれど彼女は、むずかるように首を振り続けた。

「だって私が子どもじゃない方が、お父さんとお母さんにとって嬉しいことなんだ。だから私、だれの子どもにもならない」

ぼろぼろと玉のような涙を落して、それに、と彼女は言った。

「……私も、だれからも『いらない』と言われないなら、その方が

いい」

悲鳴のような訴えだった。

親に捨てられたことは、彼女の心を打ちのめし、深く抉ったのだ。その悲しみが、怒りが、文緒には痛いほどわかった。

その痛みは、文緒にもある。深く突き刺さった悲しみで、絶えず血を流し続けている傷が、文緒にもある。

だからこそ、彼女の不安を取り除くために笑ってみせた。

「大丈夫だよ。……今度は、望まれて迎えられるんだから」

彼女は祝福と共に迎え入れられるのだ。月の使者に見出されたのだから。

もう二度と暗い山に捨てられることはない。悲しい思いをすることはない。そのはずだと、文緒は思った。

彼女は顔を覆い、すすり泣き始めた。文緒は彼女の顔を下から覗きこんだ。

跪いて、その手を取る。

どうか泣きやんでほしかった。今からする約束を、どうか信じてほしかった。

望まれたのは、彼女一人だ。文緒こそが「いらない子」なのだ。それはよくわかっていた。

けれどこの子が不安だと言っのなら、力になりたいと思った。

「もし怖いなら、一緒にいるから。ずっと、見ていてあげる。一人じゃないよ。」

鼻をすすり、彼女は濡れた目を乱暴に拭った。

こんなにかわいいのに、つい先程まで天女のような美しさでいたのに、やっぱりそをかけた弟の仕草そっくりだった。文緒は思わず、喉の奥で笑った。

なんて懐かしく、愛おしいのだろう。

「……文緒は、一緒にいてくれるの？」

「うん」

「本当に？」

目元を赤く染めて、彼女は疑わしそうに聞いた。

文緒はもう一度、心をこめてうんと頷いた。

「約束しただろ。月の宮に、一緒に行くって。だから、そうするよ」

「わかった」

彼女はこくりと頷いて、やっと花のような笑顔を見せた。

「約束だよ」

そうして、彼女は「竹姫」になった。

そして文緒は男に願い出て、その家の下人になった。

望まれたのでない文緒が男の家に行くためには、それしかなかった。少しでも彼女の近くにいたかった。一緒にいると、約束したのだ。孤独に怯える子どものために、何としてもその約束を守りたかった。

けれど男は 家の主人は、最初から文緒を疎んじた。

主は竹姫を実の子であるとして、過ぎるほどかきずき愛情を傾けた。そしてその美しさを誇り、広く世間に喧伝した。だから、竹姫が実の子ではないと知る文緒が目障りだったのだ。

文緒は輝く無欠の宝玉についた、たった一つの小さな疵だった。美しく咲き誇る花にぶらさがる、疎ましい小さな虫だった。主は文緒をそのように見なし、忌み嫌った。

主は文緒を家に置くことを渋っていた。文緒が下人として働くのを許す代わりに、主は条件をつけた。

竹姫の知己であると言ってはならない。

そして、二度と竹姫に近づいてはならない。

会うことも、言葉を交わすことも許さない。もし破れば、屋敷から叩き出す。主人はそう言い放った。

文緒はそれを了承した。どう思われようと、近くにいることができれば良かったのだ。

だから主には、置いてくれてありがとうございますと、頭を下げた。そうやって平伏し、顔色を隠すことを覚えた。文緒の下仕えは、そこから始まった。

姫への思いは胸の底へしまいこみ、誰からも見えないようにした。

この誓約を、姫は知らない。

十

「……貴女にお会いしないことが、私がここにいるための条件でした」

文緒は全てを淡々と語った。

今宵、誓約は破られた。文緒は屋敷を出て行こうと決めたのだ。何より優先し、十年守り続けたものを反故にしたというのに、不思議と穏やかな気持ちだった。

もう、姫に文緒は必要ないだろう。

文緒はこの屋敷で、何の絆も得ることができなかった。けれど彼女は違う。生まれもった美しさは磨かれ、香も衣も、身を飾るに相応しいものを手に入れた。皆の称賛を集め、彼女の前に身を投げ出して愛を乞う男たちを数多得た。助力してくれる側仕えもいる。

やはり彼女はすごいと、心から文緒は思った。

自分には何もできなかった。ただ同じ屋敷にいるというだけで、彼女のためになど思っていたことが恥ずかしい。古く幼い約束に執着してすがっていたのは文緒の方だ。文緒の心には、彼女しかなかった。

そうして無為に足踏みをしている間に、彼女はどれだけのものを得たのだろう。身分以上に、どれだけの距離が隔たったのだろう。

だから、姫に一目会って屋敷を去ろうと決めた。全て諦めたふりをしてこの屋敷にしがみついているよりも、もう一度でいいから彼女に会いたかった。今までの感謝と、いつまでも幸せを祈っていることを伝えたかった。

「今宵お目にかかれたことが、無上の喜びです」



それがかなえば、もう心残りはない。

けれど、姫は涙を流した。

頬にこぼれた大粒の雫に、文緒はぎょっとした。姫は放心したかのように、ぼろぼろと伝う涙を拭いもしない。見ていだけで、こちらの心が痛むような様だった。

文緒は思わず手を伸ばしかけ、そのままおろおろと指先を彷徨わせた。彼女の泣き顔は、どうしても駄目だ。胸が騒ぎ、どうしてもいのかわからなくなる。なぐさめて、その涙を止めてやりたいけれど、その方法もわからなかった。

姫は袖で目元をそつと押さえた。

「……あなたも、そうだったのね」

え、と文緒は虚をつかれて手を止めた。姫は力なくうつむいて言った。

「誓いで縛りつけられていたのは、私だけではなかったのね」

「……私も、お父様　あの人から、文緒に会ってはならないと言われていたわ。……文緒は人質だと、あの方は言っていた」

静かな告白に、文緒は目を見開いた。

何を、言っているのだろう。頭が真っ白になった。

「この屋敷に来てしばらく、私は誰の言うことも聞かずに、癪癪ばかり起こしていたわ。どうして文緒と引き離されてしまったのか、わからなかった。私を蔑むように見下ろす周りの大人が、とても怖かった」

それは初めて耳にする、姫のこれまでの様子だった。

「そして誰より、熱に浮かされたようなお父様の目が一番、恐ろしかった」

姫は目を伏せ、ぽつぽつと言葉を落とした。表情のない淡々とした語りだった。過ぎ去った日々を、感情を分けて、ただの記憶として思い起こしている。そんな様子だった。

「家の奥に閉じ込められて、始終見張られているのも嫌だった。悲しくて寂しくて、月を見ては毎晩べそべそ泣いていたの。　そうしたらあの人が、怒って」

鬼のような形相だったと、彼女は言った。

「私が言うことを聞かないなら、あの小僧を追いだすぞ、と　。あれを路頭に迷わせたくないのなら、娘として黙って従え。……そう言っただわ」

そして、二度と文緒に会ってはならない。言葉を交わしてはならない。　破れば、必ず文緒を追いだす、と。

「それを守りさえすれば、人質の身は保障する。追い出すことはせず、屋敷に置いて使ってやる。……そう言われて、私は従った。それしかないのだと、思った」

衝撃に眩暈さえした。足元が崩れ落ちていくような感覚だった。  
「そんな　」

文緒は額を押さえた。

縛られているのはわが身だけではなかった。　文緒こそが、姫をこの屋敷に縛り付けていたのだ。信じていたものが全て覆るようで、文緒は愕然とした。

文緒の知らないところで、姫もまた主と誓いを結んでいたのだ。  
文緒の身を守るために。

文緒が屋敷にいられたのは、自分が望んでいたからではなかった。姫に対する人質として、ただ飼われていたのだ。疎まれながらも、決して追い出されなかったのは、姫と主人の契約のためだったのだ。膝から力が抜けて、文緒はよろめいた。

「今まで、何のために」

文緒は呻くように呟いて、言葉を失った。

今までの日々は何だったのだろう。急に全てがわからなくなった。あれほど必死に、何にしがみついていたというのだろう。文緒は当事者ですらなかったのだ。すべては、姫と主の契約で定まっていたのだ。……文緒がこの屋敷にいることさえ。

姫は寂しげに笑う。

「……不思議ね。私たち、ずっと離れていたのに、同じことを考えていたんだわ」

お互いを守りたいと思っていた。お互いのために、この屋敷にしようとしたのだ。

それは同じだけ、独りよがりなことだったかもしれないけれど。

文緒はしばらく、顔を覆ったまま動けなかった。

姫に対する申し訳なさでいっぱいだった。己を責める声が、頭に響く。

ただ守られていた己が腹立たしかった。自分のことなど、いつそ捨て置いてくれてよかったのだ。知らぬ間に、意に沿わぬことを姫に強いていたのだと思うと、のうのうとしていた己が我慢ならなか

った。

何が、姫の力になりたい、だ。何一つできなかった、ただここに在ることしかできなかった身のくせに。

涼やかに竹の葉を鳴らし、風が吹きわたる。顔を上げられない文緒に、姫は何も言わなかった。優しい沈黙が、文緒には有り難かった。

けれどもやがて独り言のように、姫はぽつりと言った。

「……月に行きたいと、思っていたけれど」

文緒はのろろと頬を拭い、姫を見た。目が赤いと気づかれたくなかったが、幸い姫はこちらを向いてはいなかった。傍らの竹に手を置いて、眼下の屋敷を見下ろしていた。

姫の視線の先、庭の小さな池には、まどかの月が静かに浮かんでいる。

「どうしてか、幼い頃の方が月に近かった気がする。……文緒が、月の雫を飲ませてくれたあの時が、きつと一番月の宮に近かったのね」

今では、と姫はうつむいた。

「黄金の宮は、もう遙か遠い。ここはまるで、罪人を繋ぐ牢のよう」

罪人の牢、という言葉の重さに、文緒は胸を突かれた。

この十年は、姫にとって幸せなものだろうと思いきんできた。ここは月の宮だから、苦しみも悲しみもないのだと。孤独な日々の中で、それだけを心の拠り所に使っていたのに。

けれど姫にとって、ここは牢だったのだろうか。虜囚のように、閉じ込められ捕らわれて、苦しんでいたのだろうか。

姫はゆつくりと振り返った。静かに凧いだその瞳を、文緒はじつと覗きこんだ。

二人は言葉もなく見つめ合った。互いの瞳の奥に隠れた、折り重なった苦しみに触れたいと思った。その傷は分かち合えるものだろうか、もっと良く知りたかった。

文緒は崩れるように跪いた。      あの夜のように。

「  
」  
懺悔も感謝も、どれほど言葉を尽くしても足りないだろう。伝えたいことはあまりに多く、言い表す術を探すことさえできない。そう思って、文緒は黙ったままでいた。

じつと、ただ姫を仰ぎ見る。口の重い己が恨めしい。

けれど千の言葉より眼差しが、どれほどの思いを伝えることだろう。胸にぼつりともった灯火のようなこの思いが、伝わればいいと文緒は思った。

誰よりも大切なのだと。

姫は柔らかに微笑んだ。

「文緒、私も連れて行って」

静かな、けれどきっぱりした声だった。

「あなたが出て行くというなら、私も行くわ。ここにいる理由は、もうなくなるもの」

文緒はぽかんとして、姫を見つめた。

迷いのない姫の様子に、むしろ戸惑ってしまふ。何を言っているのかわかっているのだろうか、文緒は疑った。

「……私には何もありません」

ゆつくりと首を振って、文緒は言った。

「私と共に来れば、姫様は『姫様』ではなくってしまいます。…

…私は『火鼠の皮衣』も『燕の子安貝』も、持たないのでから」

姫に捧げる宝物など、文緒はもたない。こぞつて宝を探し、それを差し出した貴人たちとは違う。これから生きていくには、全一からやらなければならなかった。再び暗い道を、手探りで進む暮らした。

そんなものに、姫を連れて行つてはいけないと思った。

ここは罪人の牢かもしれないが、それでも飢えることはないのだ。細い綱を渡るような暮らしは、姫君には酷だろう。

だが、姫はくすくすとおかしそうに笑った。

「私、『火鼠の皮衣』も『燕の子安貝』もいらないわ。そんなもの、ないって知っているの」

大臣様と中納言様はご存知なかったようだけど。そう言って、姫は悪戯っぽく笑った。

その表情に、幼い頃の無邪気な面影が重なって、文緒は息をのんだ。

「世にも珍しい宝物なんて、いらない。私には、お伽噺で十分よ」

姫は両の手で包むように、文緒の手をそつと握った。

触れあった手から、温かな光が流れ込んでくるかのようにだった。それだけで、文緒の胸には喜びが湧き上がった。さつと雲が晴れ、周囲が明るくなったと思うほどだった。

竹林に落ちる月の光が、姫を優しく照らしている。淡く光を放っているようなその姿に、文緒は目を奪われた。

衣を取り戻した天女のように堂々と、彼女は言った。

「それに私は、『竹姫』でも『雲居の方』でもない。ただの貧しい

みなしごだもの。　　文緒は、本当の名を知っているでしょう?。」

文緒はぽかんと彼女を見上げ、　　笑い出してしまった。

彼女の素直さも率直さも、相変わらずだった。姫ではないと、軽々と言ってしまう奔放さに戸惑いも感じるが、そのことが懐かしく、やはり小気味良かった。

「竹姫」でも「雲居の方」でもない、彼女だと思った。  
珍しい宝より、姫君としての暮らしより、文緒を選ぶと。そう言ってくれているのだ。

「　　今の私は、文鷹と名乗っています」

返事の変わりに文緒はそう言つて、一度深く頭を垂れた。  
彼女はきよとした顔で、首を傾けた。

「名を変えたの?」

「ええ。しばらく前、願い出て門を守る侍になります時に。今は屋敷の皆には、そう呼ばれております」

「それはいいわ」

姫はにっこり笑った。

「文緒が『文緒』だと知っているのは、私一人なのね。　　私たち  
の本当の名は、お互いしか知らないんだわ」  
そういえばそうだと、文緒も気づいた。

文緒の名を知るのは彼女一人。そして、彼女の名を知るのも、もはやこの世で文緒しかないのだ。

それはとても、胸をくすぐられることだった。

文緒は微笑み返し、立ち上がった。  
そしてそっと、懐かしい彼女の名を呼んだ。

「雲居の方」が満月の夜、忽然と姿を消したことは、瞬く間に国中の人々の噂の的となった。

急な病でお隠れになったのか、それとも不埒な賊に盗み出されてしまったのか。人々は姫の行方を口ぐちに噂しあった。けれど真実はようとして知れず、しばらくは、姫に心奪われていた男たちの嘆きのため息が、絶えることはなかった。

だが、姫と共に姿を消した一人の男がいたことを、知る者はいない。

しばらく後、ある噂が静かに世間に広まっていった。

それはお伽噺のような信じがたい話だったが、どうしてか最も真実味があった。人々はそれを聞き、遠い月を見上げて美しい姫君に思いをはせた。

それは語りつがれ、やがて真となった。

「雲居の方」は、月の姫。使いにいざなわれ、月へ帰ったのだと。



## 十（後書き）

お読みくださり、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3874s/>

---

かぐや

2011年5月1日15時12分発行